

## ヤコブは間違った祝福を奪ったのか (創世記27章)?<sup>1</sup>

ジョナサン・マゴネット  
日原 広志 (訳)

創世記の族長家族についての物語は、時々ショッキングで読むのに苦痛なことがあります。それらは、善い振る舞いと宗教的信仰の模範となるはずと私たちが想定する人物たちについて、私たちが見ることを好み、または期待する類いの物語ではありません。ですから私たちは、私たちの宗教的伝統が、あるいは私たち自身が、彼らのために言い訳をしたり、道徳的に受け入れられない行動を何とか正当化しようとしたりする姿を見出すかもしれません。もし私たちが〔目先にとらわれず〕<sup>2</sup>彼らに起きることをもっと長い目で見れば、彼らが自らの行動の結果から逃れられず、悪行には代償が課され、あるいは経験から学び、変化し、成長していることが分かるでしょう。要するに、彼らは私たちの誰もがそうであるような、長所と短所、野心と忠誠心、責任と失敗を持ちあわせた普通の人間として私たちに示されています。私たちと同様、彼らは、複雑にもつれることもある家庭生活にもかかわらず、この世界の中で何とかして自分たちの道を見つけ、自らの運命に最善を尽くそうと努めているのです。

---

1 訳注：これは2021年5月17日、Zoomオンライン会議方式で行われた西南学院大学神学部ロングチャペルにおける公開講演である。原題は、“Did Jacob Steal the Wrong Blessing (Genesis 27)?”。

2 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

おそらく、聖書の族長でヤコブほど複雑な人物は誰もいません。双子の兄エサウのかかとをつかみつつ生まれ出たまさにその時から、彼らのトラブルを抱えた関係性を彼に想起させる名前がついて回ります。「かかと」を意味するヘブライ語は語根「アカヴ」〔עקב〕であり、これは、そもそもは誕生時の出来事の故に、ヤコブの名前「ヤアコーヴ」〔יַעֲקֹב〕の根底を成しています。しかし、動詞としては、そして明らかに彼らの物語との関係において、それは「〔策略で人の〕地位を奪い取る」こと、すなわち他者に属する何かを取ることを意味します<sup>3</sup>。後にヤコブは新しい名前、イスラエルを得ますが、これは「神と—または神のために—闘争する者」を意味します。彼がこの意義深い特徴付けを獲得してからでさえ、彼についての物語は、彼の心理状態や振る舞いに影響を及ぼし続ける内面の葛藤の一指標として、その2つの名前を切り替えて〔用いて〕います。

私は、ヤコブがまだ若い時分の最も恥ずべき行為、彼が実家を恥辱の中に去ることを余儀なくさせた行為を伝える物語を検証したいと思います。亡命中のあの時期、彼は自らも裏切りと搾取を経験しましたが、それにもかかわらず善良な人格へと成長しました。さらに彼は、自らをイスラエルの民として知られるようになる民族の物理的祖先にしたところの一家を成しました。

## エサウの祝福

聖書の物語によくあることですが、出来事の重要性は明らかにされる些細な細部にあり、それらを発見し、首尾一貫した方法でつなぎ合わせようとするのは読者の義務です。この読み解きに何を含めるかを選ぶ際には、必然的にかかなりの主観が伴います。以下は、父イサクが長男エサウに与えようとしていた祝福をなぜヤコブが奪うに至ったのか、そしてこの行動の後、エサウとの確執が解決するまで、あるいは少なくとも共生できる目途がつくまで何が続いたのかをめぐる一つの解釈です。

---

3 創世記 27章 36節、ホセア 12章 4節、エレミヤ 9章 3節。

将来のトラブルの最初の重要な兆候は、イサクの妻であるリベカの妊娠と、母胎内での2人のまだ生まれていない子どもの闘争らしきものと共に見られます。彼女は神に伺いを立てに行き、以下の応答を受け取りました。

二つの国民があなたの胎内に宿っており  
二つの民があなたの腹の中から分かれ出る。  
一方の民は他方の民より強くなり  
兄は弟に仕えるようになる。(創世記25:23)<sup>4</sup>

そのような神託でよくあることですが、結語のヘブライ語は曖昧で、最終文は「弟は兄に仕えるようになる」とも同等に意味し得るものです<sup>5</sup>。読者は既にここで、子宮内の確執は双子の生涯を通して、更にはそれをも超えて続くことであると警告されています。

聖書世界の伝統は、長男が家長として父の後を継ぐことを期待しています。しかし、これに反して、神が長男よりも次男を、または任務に最も似つかわしくない人物を選ぶというのが繰り返し起きる聖書のパターンであり、神はあたかも故意に慣習的規則を破っているかのようです。おそらく神は、ある神的計画を成就するために必要な何かをその個人の中に見ているのです。この神託は、私たちに少なくとも2つの問いを残します。第一に、双子〔の間〕及びそれぞれの家族の間の将来の関係性という観点において、それは単純に何を意味しているのでしょうか？ 誰が支配的な人物になるのか、そしてそれは永続的なのか、それとも変わりうるものなのでしょうか？ 第二に、これはより推論的ですが、リベカはその神託をどう理解したのか、そして彼女

---

4 訳注：以下、日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。

5 訳注：ヘブライ語本文はヴェ・ラヴ ヤアヴオード ツアーイール [ורב יעבד צעיר] であり、このように動詞との性数が二名詞とも一致し、且つ定目的語を指示する前置詞エート「を」[אֶת]を欠く場合、SVO 構文の主語と目的語は特定できず、文脈と解釈に委ねられる。

はそれを夫イサクに伝えたのでしょうか？ イサクは既に、彼女が不妊だった折、彼女の代わりに神に懇願したことがありました。なぜ彼は、彼女の中で起きていることについて神に伺いを立てに行くリベカの旅に関わらなかったのでしょうか？ 多分彼女が一人で行ったのは、私的な事柄は女性たちの内面世界に留められていたからでしょう。

最初の子が赤い毛で覆われて生まれ、「彼ら」—おそらく両親—は、彼を「エサウ」と名付けました。それから2人目がエサウのかかをつかんだまま現れ、「彼」—おそらくイサクだけ—が、彼をヤコブと名付けました。誰が命名したかの違いは、語り手による興味深い区別です。それは私たちが気付きはしても、それに意味があるかどうか分からないままになるようなことです。しかし直ちに私たちは、双子であるにもかかわらず、2人の男の子は気質が非常に異なっていることを知らされます。「エサウは狩りが巧みな野の人となったが、ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた。」(創世記25：27) ヤコブを表す「ターム」という言葉は「完全性」、おそらく無垢とか高潔を意味します。しかし、これが本当に彼の性格をどこまで表しているのかは明らかではありません。

兄弟が非常に異なる場合、両親はそれぞれ自分のお気に入りを選び、理解はできるものの、こうして彼らの間の潜在的な軋轢を高めます。一方の子どもを他の子より可愛がるのは、次の世代においてヨセフの悲劇的な経験をもたらしたのと同様の過ちです。

イサクは狩りの獲物が好物であったのでエサウを愛していたが、リベカはヤコブを愛していた。(創世記25：28)<sup>6</sup>

---

6 イサクがエサウを愛することについてのそのフレーズは字義通りには「彼の口の中のツァイド『狩りの獲物の肉』[רֶגֶל]の故に」と読める。それは一般には、食べさせるために父の口へと運んだ、エサウが狩りで獲ってきた食物の意味に理解される。私は〔冒頭で〕模範的な人物の問題のある振る舞いを正当化し、反対にその敵役とみな

ここで、父親には理由があり、母親には理由が欠けていることは興味をそそる区別です。物語の観点から、それはエサウのために意図された祝福を獲得せんとするヤコブの策略へと至る状況を設定しています。しかし、一組の短文で、4人の異なるキャラクターの動機と、あり得る相互作用を示唆することは聖書の語り手の技巧を思い出させるに十分です。この簡潔な表現は、エーリヒ・アウエルバッハの名言「背景をそなえている」<sup>7</sup>そのものである故に、そこに潜在的にある全てのものについては、覆いを取ろうとする読者の想像力に委ねられているのです。

本文は何年か先に一気に跳びます。ヤコブはおそらく、手料理で父親の愛を獲得しようと野菜スープを準備しています。エサウは疲れ、腹を空かせて野から帰ってきます。2人の生活様式の対抗関係が描かれていますが、それぞれの性格を示すさらなる証拠でもあります。エサウは礼儀正しく赤いスープのいくらかを所望しますが、普通は動物が食物を貪り食う場合だけに限定される稀な食事の言い回しが使われています。ヤコブはエサウの空腹に付け込み、小さな器一杯のスープと引き換えに彼の相続権、長子としての法的地位を売り渡すように求めます。エサウの返答は、単なる誇張ないし皮肉なこき下ろしとして読むことができますが、それに対する彼の無関心を示しています。「ああ、もう死にそうだ！長子の権利などどうでもよい！」（創世記25：32）彼らは日常的にそうしているかもしれないように、些細なことをめぐって口喧嘩している青年たちでしょうか？ 片や将来を改善しようと計算し、片や基本的な欲求で今だけを生きている大人たちでしょうか？ 私たちにわか

---

された人々を批判しようとする、宗教的伝統の中にある傾向について言及した。本事例において、あるラビの伝承は、エサウが「ツァイド『狩り』(ציד)に熟練した」というフレーズを、彼は狡猾な狩人だったという意味に解する。「狩り」を意味する同じ単語「ツァイド」が、彼が父へと持って来た「狩りの獲物の肉」にも用いられる時、ラビたちは、エサウは父に取り入るべくイサクを騙しに来たと想定するのである。

7 Cf. Erich Auerbach 'Odysseus' Scar' in *Mimesis* (Princeton Paperback Edition, 1968), pp.3-23. [訳注：E・アウエルバッハ（篠田一士・川村二郎訳）『ミメーシス（上）』（筑摩書房、1990年15刷）、15頁。]

るのは、語り手が、双子の互いに相手とは異なる性質についてのもう一つの重要な手がかりとして、この話を含めたということだけです。エサウは同意し、彼の長子相続権を売り渡します。本文は、次に起こることを5つの簡潔な動詞で説明しますが、これは早送りした映画の連続シーンのカクカク感に相当する文学技法です。

ヴァッヨーハル ヴァッイエーシユト ヴァッヤーコム ヴァッイエーラフ  
ヴァッイヴエズ エーサーヴ エト・ハツ・ベホーラー

[ויאכל וישת ויקם וילך ויבז עשו את־הבכרה]

エサウは食べた、飲んだ、立った、去った、長子の権利を軽んじた。

(創世記25：34)<sup>8</sup>

双子のどちらかについて次に出てくる情報は、40歳のエサウが2人のヘト人の女性と結婚し、彼女らの振る舞いがイサクとリベカの二人を悩ませたということです(創世記26：35)。直後の27章は、イサクが年老い、視力が弱ってきているという情報で以て始まります。彼はエサウに「死ぬ前に私自ら、お前を祝福するために」自分が食べるための好きな料理をこしらえるように求めます(創世記27：4)。イサクの締めくくりの言葉は文字通りには、「私のネフェシユがあなたを祝福するために」です。ネフェシユ「生命力」[נפש]は伝統的に「魂」と訳されていますが、「自分自身」を表すためにも使用されます。ロバート・アルターは、創世記注解の中で、この言葉を「生命の息吹」と説明し、それは「私」の強意の同義語であり、それによってイサクが言っていることの重要性に強調を加えて「私が厳かにお前を祝福するために」[の意となる]と付言します<sup>9</sup>。イサクの意図の真剣さに疑いの余地はありません。エサウは父親への特別料理をこしらえるために動物を捕まえようと野に出かけます。

8 訳注：講演者の英訳による。協会共同訳では「彼は食べて飲み、そして立ち去って行った。エサウは長子の権利を軽んじた。」となっている。

9 Cf. Robert Alter, *Genesis: Translation and Commentary* (W. W. Norton and Company, New York, London, 1996), p.137.

リベカの反応に移る前に、イサクについて知っていることで隙間を埋めておきましょう。母親サラが出産期を過ぎてからずっと後の老齢に彼が誕生したことは奇跡的な出来事でした。彼の子供時代について私たちが持っている唯一の言及は、異母兄イシュマエルが彼と「遊び戯れる」<sup>10</sup>やり方についてのサラの懸念と、アブラハムの後継としてイサクには一人のライバルも存在しないように、イシュマエルと彼の母親ハガルを遠ざけよとの彼女の主張だけです。しかし、イサクの名声は彼の能動的活動にあるのではなく、彼を犠牲としてささげよとのアブラハムに対する神の要求の、一見受動的な受容にあります。最後の瞬間にイサクの命は救われましたが、まだ生きているのにどういふわけか彼は私たちの意識から姿を消してしまいます。それはまるで彼の人生における実存と目的が、アブラハムのドラマにおける彼の役割によってどうやら果たされてしまったかのようです。ある意味、彼は全く文字通り姿を消します。彼が犠牲になりかけたあの物語の最後の文は、アブラハムと2人の若い従者がどのように家に帰ったかを描きますが、イサクの名前は本当に省略されています（創世記22：19）<sup>11</sup>。次に彼が現れるのは25章で、アブラハムが彼を唯一の相続人とし、他の子供たちを遠ざける時です。アブラハムが長寿を全うすると、イサクはイシュマエルと一緒に彼をヘブロンのマクベラの洞窟のサラの傍らに葬ります（創世記25：9-10）。その後の一節は、神がアブラハムを直接訪れて彼を祝福したのと同じように、神はまたイサクを

10 ここ創世記 21 章 9 節で「遊び戯れる」とある単語 *メツアヘーク* [מְצַחֵהוּ] はイサクの名「イツハーク」[יִצְחָק] についての多くの言葉遊びの一つである。イツハークは動詞 *ツァーハク* [צָחַק] に基づく。その意味は「笑い声」（創世記 18：12）と「遊ぶ」、更には「勝負する」（サムエル記下 2：14）あるいは「性行為」（創世記 26：8）にまで至る間で様々である。

11 訳注：「アブラハムは朝早く起きて、ろばに鞍を置き、二人の従者と息子イサクを連れ、焼き尽くすいけにえに用いる薪を割り、神が示した場所へと出かけて行った。」（創世記 22：3）と「アブラハムは従者のところへ戻り、皆一緒にベエル・シェバへと向かった。」（創世記 22：19）を参照。なお講演者の創世記 22 章についてのより詳細な研究についてはジョナサン・マゴネット（小林洋一訳）「アブラハムは神のテスト（試み）に合格したのか—創世記 22 章に関する省察—」同著編者『ラビの聖書解釈—ユダヤ教とキリスト教の対話—』（新教出版社、2012）、44-68 頁参照。

も訪れたと述べます。祝福の内容の詳細はここには全く示されていませんけれども。

アブラハムが死んだ後、神はその子イサクを祝福された。イサクはベエル・ラハイ・ロイの近くに住んだ。(創世記25:11)<sup>12</sup>

イサクはリベカと結婚した時40歳であり(創世記25:20)、彼女は不妊だったので、彼は彼女に代わって神に懇願し、そして私たちがそこから〔講演を〕始めた双子の誕生につながります。飢饉の時、神の命令により、イサクはペリシテ人の地ゲラルに移ります。そこでは、父がそうしたように、土地の男たちがリベカの美しさに興味を持っているので、殺されるかもしれないという恐れから、彼は彼女が妹であるふりをします。ゲラルの王アビメレクは、二人が愛の営みをしているのを見つけ<sup>13</sup>、イサクの嘘を責めますが、彼の恐れのもっと正当性を受け入れ、結局彼を保護します。神に祝福されたイサクは、農作物、羊の群れ、牛の群れ、そして多くの僕を持つようになったので、地元のペリシテ人が彼に嫉妬するほどになりました。アビメレクはイサクの力が大きくなりすぎたので出ていくよう命じ、イサクは発ってゲラルの涸れ谷に天幕を張ります。これ以降の彼の人生の主な活動は、父親によって掘られ、ペリシテ人によって塞がれていた井戸を掘り直し、また、たとえそれが地元民との軋轢を引き起こしたとしても、新しい井戸を掘り当てることに関わっていました。結局、アビメレクはイサクを訪れ、彼らの間で平和条約を結びます。

アブラハムとヤコブの人生について叙述する多くの章とは異なり、事実上、イサクの人生全ては26章だけで扱われており、それ以降は彼の子供たちの物

---

12 ベエル・ラハイ・ロイはハガルとイシュマエルを救った井戸の名である(創世記16:14)。またイサクはリベカと会う前にそこに住んでいた(創世記24:62)。

13 ここで使われているその動詞はメツァヘーク [מצחק] である。イサクの名についての他の多くの言葉遊びについては注10を参照のこと。



語です（27-36章）。彼の死は創世記35章28節に簡単に記されています。見たところ、彼はもの静かでありながら非常に成功し繁栄した人物であり、周囲の社会に貢献し、その指導者との平和に満ちた関係を創出することができたようです。それで、今や年老いていますが、彼が息子エサウに与えたいと願う祝福についての彼の決定に疑問を持つ正当な理由はあるのでしょうか？

明らかに、リベカはそれについて疑いを抱いています。彼女は「彼の息子」であるエサウに語るイサクの言葉を聞き、緊急に対処する必要性を感じて、「彼女の」息子であるヤコブにそれらを詳しく語ります。私たちはイサクの人生と性格について再認識してきたので、リベカの生涯も同様に熟考すべきでしょう。彼女は、アブラハムが名の記されていない老僕を故郷に送って、イサクのために妻を見つけさせた創世記24章で劇的に紹介されました。老僕はあるテストを設定し、それは直ちにリベカ—アブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの息子ベトエルの娘（創世記24：15）として読者に紹介された—によって引き受けられます。彼女は極めて美しく、男を知らない処女だったと描写されています。老僕から水を所望された時彼女はそれに応じ、彼が飲み終わると、彼のらくだの群れにも水を与えると申し出ました。これは、イサクにふさわしい妻を示すために企図されたテストとして、老僕が神にした提案を完全にクリアするものです。少なくとも西洋美術では、可憐な少女が喜んで井戸に小走りし、水がめを満たし、おそらく彼女の動物に対する気遣いを表しつつ、老僕のラクダのために水を水槽にあけるというリベカの伝統的なイメージがあるようです。しかし、のどが渴いたラクダは、長旅の後、最大30ガロンの水を飲みほせることを忘れてはいけません。使用人は10頭のラクダとともに旅をしました<sup>14</sup>。それで、他の資質も持ち合わせているでしょうが、彼女は肉体的に強く、スタミナと強い意志を備えています。

---

14 この僕が、誰一人それを果たせないだろうことを見越してこの極めて大量の課題を設定したというのは多分にありそうなことである。彼の名前は記されていないが、もし子どもがいなければアブラハムから一切を受け継ぐ可能性のあったエリエゼルと呼ばれる僕への言及が存在する（創世記 15：2-4）。そのことは、リベカがこの課題の遂行に着手した時、何故僕が瞠目し、神が実際に彼の主人の必要に配慮している事を渋々認めざるを得なかったかの理由を説明している。

結婚が合意されると、家族は彼女の出発を1年遅らせようとします。しかしリベカは、すぐに発つ気があるかどうか尋ねられた時、同意します。そこに私たちは、彼女が自立した存在である証拠を確認します。すでに述べたように、双子が彼女の内で闘争した時、彼女は、これが何を意味するかを解明する神からの託宣を求めて、自分一人で旅立つ心構えができていました。

なぜリベカはイサクとエサウの間の会話を聞いていたのでしょうか？ 先代では、サラもまたアブラハムと3人の訪問者との間の会話に聞き耳を立てていたことが想起されます（創世記18：10）。それが示唆するのは、この事は単に、聖書の家父長制家庭生活の力学の一部であるということです。法的・政治的権力は家長にありましたが、家庭内で起こったことは妻の責任であり、進行中の事を把握しておくことは彼女の義務でした。イサクは年をとって視力が衰えていたので、リベカは、もし必要とあらば、彼自身〔が誰かに惑わされて誤った決定を下すこと〕から彼を保護する必要性を感じていたのかもしれない。エサウの結婚が両親に苦痛を与えていることはすでに述べました。エサウに対するイサクの言葉はヤコブに直接影響を与えるため、リベカは彼に代わって行動する必要性を感じます。しかし、ここでは彼女の母親としての感情以上のものが問題になっている可能性があります。多分彼女は、二人の息子の一方が他方に隷属するという、彼らの後の人生におけるある種の闘争について語る神からの曖昧な託宣に影響を受けてきたのです。彼女は、介入することは神が彼女に期待していることなのではないかと自問自答してきた可能性があります。

リベカの実際の発言の検証に立ち入るに及んで、私たちは重要な釈義上の選択に直面します。語り手によって記録されているものと、物語の登場人物の1人によって報告されたそれについての〔当初のものと異なる〕バージョンとの間の表現のわずかな違いに、私たちはどの程度重要性を置くべきでしょうか？ そのような違いは、同じ発言についての単なる文体上の差異として無視されるべきでしょうか？ それとも強調や意味の重要な変化を示してい

のでしょうか？ 既に指摘したように、語り手のバージョンにおいて、イサクはエサウにこう言っています。「死ぬ前に私のネフェシユがあなたを祝福するために」、または「死ぬ前に私が厳かにあなたを祝福するために」と。しかし、リベカはヤコブにこう言っています。

たった今、お父さんが兄さんのエサウにこう言っているのを聞きました。  
『獲物を捕って来て、おいしい料理を作り、私に食べさせてほしい。死ぬ前に、私は**主の前**で、お前を祝福したいのだ。』（創世記27：6b-7）

イサクがエサウを祝福したいと言った時、彼の言葉の重要性と厳粛さは疑いの余地がありませんが、彼女のバージョンでは、彼女は「リフネー アドナーイ」[לפני יהוה] つまり、「主」「の前で」または「の現臨の只中で」という語を付加しています。これは、イサクの実際の言葉には元来存在しなかった付加的な意味を与えているのでしょうか？ リベカはイサクが行おうとする祝福をどのように重視しているのでしょうか？

自分の父親の目が見えない点につけ込むことに気乗りしないヤコブを、彼女がどのように説得したかについて、私たちは極めて詳細に分かっています。怖がるヤコブは、もしイサクがその欺きに気づいたら、「私は、祝福どころか呪いをこの身に招くことになります」と心配します。それに対してリベカは「息子よ、その呪いは私が引き受けます。お前は、ただ私の言うことを聞きなさい。」と〔言って〕彼を安心させます（創世記27：12-13）。そうして、自分の前にいるのはエサウなのかというイサクの明白な疑念にもかかわらず、イサクを納得させられるようにヤコブは変装します。策略は効を奏し、ヤコブはエサウのために意図された祝福を受けとります。

ああ、わが子の香りは／主が祝福された野の香りのようだ。  
神があなたに与えてくださるように／天の露から、また肥沃な地を／  
豊かな穀物と新しいぶどう酒を。<sup>15</sup>

もろもろの民はあなたに仕え／諸国の民はあなたにひれ伏すように。／  
あなたは兄弟の主となり／母の子らはあなたにひれ伏すように。／  
あなたを呪う者は呪われ／あなたを祝福する者は祝福される。<sup>16</sup>

(創世記27：27b-29)

ヤコブが去るやいなや、エサウが狩りから戻って父親のために食事の準備に取り掛かります。彼が料理をイサクのところへ持って来ると、真相が明らかになり、裏切られたエサウは「大いなる苦痛に満ちた叫び声」(創世記27：34)を上げます<sup>17</sup>。彼は父親に祝福を求めますが、イサクが与えることができたのは次のことだけです。

---

15 訳注：この行のみ講演者の英訳による。協会共同訳では「神があなたに、天の露と肥沃な地を／豊かな穀物と新しいぶどう酒を／与えてくださるように。」となっている。

16 アブラハムの召命時に神から与えられた祝福(創世記 12：3)と内容的に響き合う部分はこの最後の一行だけである。

17 本講演とは直接関連しないことであるが、エサウのこの叫び〔ツェアーカー ゲドラー ウー・マーラー アド-メオード צעקה גדלה ומרה עד-מאד〕は聖書の他の歴史を通じて反響することになる。エサウの息子エリファズには側女ティムナとの間にアマレクという名の息子がいた(創世記 36:10-12)が、彼はアマレク人の祖と考えられる。イスラエルの民がエジプトを出て来た時、その途上で、アマレク人は彼らの最も弱い者たちを攻撃したので、神はアマレクの記憶を天の下から消し去るよう要求する(出エジプト記 17:14-16、申命記 25:17-19)。しかし〔後に〕サウル王がそのように行う機会を得た時、彼はアマレク王アガグを寛大に扱ってしまう(サムエル記上 15:8)。数世紀の後、エステル記において、ユダヤの民を滅ぼすことを望む一人の敵がおこるが、彼の名はアガグ人ハマンド、語り手にはあのアマレク王の末裔と推測されている。ハマンのユダヤ人絶滅計画を知るに及んで、モルデカイはエサウと同じ語を用いて「大いなる苦しみに満ちた叫び声」〔ゼアーカー ゲドラー ウー・マーラー וצעקה גדלה ומרה〕を上げるのである(エステル記 4:1)。

見よ、肥沃な地から、あなたが住む所には〔もたらされよう〕／上は天の露から。<sup>18</sup>

あなたは剣によって生き／弟に仕えるようになる。／

ただいつの日か、あなたは束縛から脱して／自分の首からその轡を解き放つだろう。（創世記27：39-40）

最初の文はヤコブに与えられたものとほとんど同じです<sup>19</sup>。あたかも「肥沃な地から遠く離れて」という意味であるかのように読んで、〔ヤコブの奪った祝福との〕違いを打ち立てることも可能ですが、単に二人とも地の産物から利益を得るだろうという意味にもとれます。しかしながらエサウのバージオンには、この豊富に与えられるものの源泉としての神への訴えはありません。しかし〔最初の文の類似はともかく〕単にそれ〔27：39-40全体〕が強調しているのはエサウにとって生計は剣によって立てられるということです。両者の力関係の最終的な変化こそ約束されていますが。

エサウはヤコブを憎み、イサクの喪が明けたら彼を殺そうと脅したとあります。そのような状況で、ヤコブの唯一の選択は逃げることでした。彼の母親は、再び自分の声に従い（創世記27：8, 43）、ハランにいる彼女の兄ラバンのところに逃げ、エサウの怒りが収まるまでそこに留まるよう彼〔ヤコブ〕に命じます。彼女の別れの言葉は、「どうして一日の間に、お前たち二人

---

18 訳注：この行のみ講演者の英訳による。協会共同訳では「あなたが住む所は肥沃な地からも／天の露からも離れるだろう。」となっている。

19 訳注：ヘブライ語本文ではヤコブにはミツ・タル ハッ・シャーマイム ウー・ミ・シュマンネー ハー・アーレツ「かの天の露から、そしてかの地の諸々の肥沃さから」〔מטל השמים ומשמני הארץ〕、エサウにはミ・シュマンネー ハー・アーレツ…… ウー・ミツ・タル ハッ・シャーマイム メー・アール「かの地の諸々の肥沃さから…そして上にはかの天の露から」〔ומטל השמים מעל... משמני הארץ〕と、前置詞ミン「から」〔מן〕を用いた並行法で、兄弟に同じ語が与えられている。翻訳では解釈上、ヤコブへのミン〔מן〕には「を」、エサウへのミンには「から遠く離れて」と、対照的に訳し分けられがちだが、本文はかなり曖昧である。

を失ってしまってよいでしょう。」(45節)<sup>20</sup>です。しかし、その亡命は20年間続き、彼女は確かに自分がヤコブに代わって引き受けると約束したその呪いの重荷を負うことになります。リベカは二度と彼女の最愛の息子に会うことはありません。

彼女はイサクに、エサウの妻であるヘト人の娘たちとの揉め事を理由に、ヤコブは彼女の実家の厄介になって、その地でふさわしい妻を見つける方がよいからと説明します。

奪われた祝福の話はそこで終わったかもしれませんが、イサクとヤコブの最後の会話がまだ残っています。リベカの提案を受け入れ、イサクはヤコブに、母の家族のところに行って、そこで彼女の兄ラバンの娘たちの中から妻を見つけるよう正式に指示しました。しかし、彼が去る前に、イサクはヤコブに別れ際の祝福を提供します。創世記の読者にとっては、そのバリエーションが既にアブラハムとイサクに与えられていたので、もはやこの祝福にはとても馴染みがあるでしょう。

### アブラハムの〔継承される〕祝福<sup>21</sup>

故郷を離れて未知の場所へ旅に出るようにとのアブラハムに対する神の召し出しには、祝福として表現された彼の将来についての約束が含まれていま

---

20 リベカは劇的な自己表現に長けている。胎内で双子が押し合った時には「こんなことでは、一体私はどうなるのでしょうか」と叫んだ(創世記 25:22)。ここ〔27章〕では彼女はもう一つの修辞疑問を使っている。「もしヤコブが同じように、この地の娘たちの中からあのようなヘト人の娘を妻に迎えるとしたら、どうやって生きてゆけばよいのでしょうか。」(創世記 27:46)

21 訳注：講演者は章題を *The Esau Blessing* 「エサウの祝福」、*The Abrahamic Blessing* 「アブラハムの祝福」と意図的に対比させ、エサウのための一回限りの祝福と、最終的にシナイ契約によって置き換えられるまでアブラハムの家系に継承されたアブラハムの祝福を区別している。「アブラハムの／流／家の」いずれも適切でないため便宜上「アブラハムの〔継承される〕祝福」とした。

す。それは、聖書の族長物語を通して何度も繰り返され、さらに拡張されるものの最も単純な形です。

私はあなたを大いなる国民とし、祝福し／あなたの名を大いなるものとする。／あなたは祝福<sup>22</sup>となる。あなたを祝福する人を私は祝福し／あなたを呪う人を私は呪う。／地上のすべての氏族は／あなたによって祝福される。（創世記12：2-3）

それはその壮大さにおいてほとんどナンセンスなものです——一人の個人から大いなる国民が生まれ、彼の名声は〔当時の聖書の民に〕知られていた世界全体に広がります。その名声と共に、他の人々からの祝福と憎しみの両方もたらされます。しかし、ある究極の神的目的の一部として、アブラハムは世界のすべての住民に祝福をもたらすのです。

この祝福が次に現れるのは創世記17章1-8節であり、そこで神は自らを後に繰り返される名、エル・シャッドイ「全能の神」〔אֱלֹהִים〕として紹介します<sup>23</sup>。この章句で、神はアブラハムと正式な契約を結びます。その過程に、彼の名前をアブラムからアブラハム—これは「多くの国民の父」を意味すると説明されています—に変更することが含まれていました。それは、創世記の最初の章（1：28）と大洪水後のノアへの最初の命令（創世記9：1）に私たちを連れ戻す2つの単語、ペルー ウー・レヴー「産めよ、増えよ」〔פְּרוּ ורבו〕を導入することによっていっそう強化されています。ここ〔17章〕で、その〔2〕単語は2つの節に分かれていて、2節には「あなたを大いに増やす」、そして6節には「私はあなたを多くの子孫に恵まれる者とする」とあります。これらの2つの文のバリエーションは、創世記22章17節、26章4節、28章3節、35章11節における祝福の各バージョン中にも登場します。

---

22 訳注：協会共同訳では「祝福の基」。

23 創世記 28 章 3 節、35 章 11 節、43 章 14 節、48 章 3 節、49 章 25 節、出エジプト記 6 章 3 節。

あたかも神がアブラハムにどの土地を示そうとしているのかについて真っ先に起きる疑問を解決するかのように、この契約の結語には以下の文が含まれています。「私はあなたが身を寄せている地、カナンを、あなたとあなたに続く子孫にとこしえの所有地として与える。」(創世記17:8)

よく知られているように、この祝福が次に登場するのは、創世記22章で神がアブラハムを試みた直後です。このバージョンは、アブラハムの子孫が「増し加わること」にまで拡大されています。「私はあなたの子孫を空の星のように、海辺の砂のように大に増やす」。星のイメージは創世記26章4節の祝福のバージョンにおいて再登場することになります。この章句は「あなたが私の声に従ったからである。」(22:18)という強調で終わり、この部分は26章5節で、神がイサクに、これらすべての祝福が起こるのは「アブラハムが私の声に従ったからである」と告げる時に繰り返されることになります。

上述〔8頁〕の通り、アブラハムの死後、神はイサクを祝福しましたが(創世記25:11)、その与えられた祝福の内容は示されていません。しかし、飢饉が起きた時、神はイサクにエジプトに下るのではなく、ペリシテ人の地ゲラルに行くように命じました。その後、神によるイサクへのアブラハムの祝福の直伝が続きます。

その地に滞在しなさい。私はあなたと共にいて、あなたを祝福する。私はこれらの地をすべて、あなたとその子孫に与え、あなたの父アブラハムに誓った私の誓いを果たす。私はあなたの子孫を空の星のように増やし、これらの地をすべてあなたの子孫に与える。地上のすべての国民はあなたの子孫によって祝福を受けるであろう。アブラハムが私の声に従い、私に対して守るべきこと、すなわち、私の戒め、掟、律法を守ったからである。(創世記26:3-5)



おそらく、これらの土地を所有して査定する責任が、父の井戸を掘り返し、その土地の至る所で新しい井戸を掘り当てることに対するイサクの粘り強さを説明するものです。なぜなら、これらがそこで人間が定住し生存する可能性を決するからです。

この背景全ては、イサクがヤコブを彼の母の父ベトエルの家のあるパダン・アラムに送り出すに先立って、イサクが認識しつつヤコブに授けた祝福の重要性を説明するために必要です。

エル・シャッドアイ<sup>24</sup>がお前を祝福して、子孫に恵まれる者とし、その数を増やされるように。そして、お前は多くの民の集まりとなるように。また、彼<sup>25</sup>がアブラハムの祝福をお前とお前の子孫に与えてくださるように。それは、神がアブラハムに与えた地、お前が身を寄せているこの地を、お前が受け継ぐためである。(創世記28：3-4)

アブラハムからイサクへ、それからヤコブへの祝福の伝統のこの連鎖のさらなる連続性を完成するまさにそのために、彼ら各々が、神からも直接に祝福を受けましたが、今度はヤコブの番になるわけです。故郷に戻ってエサウと和解した〔33章〕ずっと後〔35章〕、神は彼の名前がヤコブからイスラエルに変わった—それは夜中に謎の男と格闘した後に起きたこと〔32：29〕でしたが—ことを追認し〔35：10〕、このように続けます。

神はまたヤコブ<sup>26</sup>に言われた。「私はエル・シャッドアイである。産めよ、増えよ。あなたから一つの国民、そして諸国民の集まりが起こり、あなたの腰から<sup>27</sup>王たちが出る。私は、アブラハムとイサクに与えた土地を

---

24 訳注：協会共同訳では「全能の神」。以下同。

25 訳注：協会共同訳では「神」。

26 訳注：協会共同訳では「彼」。

27 訳注：協会共同訳では「あなたから」。

あなたに与える。また、あなたに続く子孫にこの土地を与える。」(創世記35：11-12)

これら複数の祝福のありうる起源、違い、目的を巡っては多くの〔神学的〕論争が存在しますが、創世記という〔最終形態の〕書にとって、アブラハムの〔継承される〕祝福は、立ちふさがらぬあらゆる種類の障害にもかかわらず、これらの3世代に亘って首尾よく伝達されていることは明らかです。誰が正当な相続人なのかは各世代において争われます。すなわち、イシュマエルかイサクか、ヤコブかエサウか？ 人々がこれについて自分自身の決定を押し通そうと一サラが、自分が不妊なのでアブラハムが息子を授かるためにハガルを娶るよう主張したり、リベカが、イサクがエサウに授けたいと思っていた祝福をヤコブに得させようと試みたり一する時、何が起こったのでしょうか？ いずれの場合も、途中でこれらの逸脱があるにもかかわらず、神の計画は成就されます。これは、本講演によって提起された問い〔ヤコブは間違った祝福を奪ったのか？〕に対する明白な答えを私たちに残します。もしも神的経綸にとって決定的なものがアブラハムの〔継承される〕祝福であるなら、ヤコブは、〔それがエサウへ与えられると誤解した〕リベカの主張に乗って、間違った方の祝福を〔エサウから〕奪っていたこととなります。実際、ほとんど偶然に、彼は家を出発する丁度その時にイサクから正しい方の祝福を受け取ったのです。イサクが意図的にそれをヤコブに伝えたことは、エサウのために意図されたあの祝福がまったく別物であったことを示唆しています。

エサウの祝福を見ると、その中に、結末の文「あなたを呪う者は呪われ／あなたを祝福する者は祝福される」を除いては、アブラハムの〔継承される〕祝福の中にあるものが事実上何もありません(創世記27章29節と創世記12章3節を比較)。では、それは何を意図したものであったのでしょうか？ それは父親の財産を相続する権利を示す一環として、長子に授けられる単なる親の祝福であったように見えます。しかし、おそらく十分にそのアブラハム

の〔継承される祝福の〕伝統に気づいていたりベカは、イサクの意図を誤解しました。それこそが、彼女がヤコブに、「リフネー アドーナーイ」—「主の前で」または「主の現臨の只中で」—というフレーズを付加して、イサク本来のものとは異なる発言を伝えてしまった理由です。それは、ヤコブの亡命、ラバンの手による彼の長年の苦難、家族と相当な家畜の富の獲得へと至る一連の出来事の始まりでした。しかし、ヤコブはエサウから祝福を奪ったので、彼には和解が可能になる前に、自らがエサウにもたらした被害を埋め合わせるために行わなければならないことがあります。

ヤコブは、彼の家によく戻る時、自分に先立ってエサウに一連の家畜の贈り物をするにより、それを実行しようと試みます。この「贈り物」を意味するヘブライ語の単語はミンハー [מנחה] であり、それは数回繰り返され、私たちの注意を引くキーワードになっています。エサウがこの家畜の群れについて尋ねる時に備えて、ヤコブは僕たちにこう答えるよう指示します。

「…それらはあなたの僕ヤコブに属するものです。それらは、私の主人であるエサウ様に差し上げるミンハー『贈り物』です。そして彼〔ヤコブ〕も後から参ります。」……というのもヤコブは「そのミンハーを先に行かせて、エサウをなだめ、その後で顔を合わせれば、恐らく赦してくれるだろう」と考えたからである。こうして、そのミンハーは彼より先に行った。(創世記32: 19, 21b-22)<sup>28</sup>

その夜、ヤコブは謎の男と格闘し、自らの新しい名前を獲得します。翌朝、彼はエサウが400人の男と近づいてくるのを見ます。そしてついに対面した時、

---

28 訳注：講演者の英訳による。協会共同訳では「あなたの僕ヤコブの家の者です。またこの家畜の群れは、私の主人であるエサウ様に差し上げる贈り物です。御覧ください。ヤコブも私たちの後から参ります。」……ヤコブは贈り物を先に行かせて、エサウをなだめ、その後で顔を合わせれば、恐らく赦してくれるだろうと考えたのである。こうして、贈り物は彼より先に行き、…」となっている。

エサウは尋ねます。「ところで、私が先に出会ったあの全ての陣営は何なのか？」<sup>29</sup>明らかに、彼は動物の群れに言及しています。彼が動物の一隊を説明するためにマハネー「陣営、軍」[מַחֲנֵה] という単語を使用することは、ミンハー「贈り物」[מִנְחָה] という単語にかけた全くの言葉遊びなので、おそらく語り手側の、あるいはエサウ自身による場合でさえあり得る意図的なものです。ヤコブはその質問に「ご主人様のご好意をいただきましたかったです」と答えます。それに対してエサウは、「私にはすでに多くのものがある。弟よ、あなたのものはあなたが持っていない。」と答えます（創世記33：8-9）。語り手は、ヤコブの知るどちらかという粗野な狩人とはまったく異なるエサウを私たちに紹介しています。彼はかなり意図的に、そしておそらく皮肉をこめて、自分に取り入ろうとするヤコブのあからさまな賄賂を受け入れることを拒否しているようです。「あなたのものはあなたのものであるままにしておけ」という言及は、あの奪われた祝福について語っており、あたかもエサウはヤコブからもっと何かを待っているかのようです。[見透かされた] ヤコブは以下のようにエサウに懇願することによって、劣勢を挽回しようとしています。

「どうか、もしご好意をいただけますならば、私の手から私のミンハーを受け取ってください。なぜなら人が神の御顔を見るように、私はあなたの顔を見ており、あなたは快く私を受け入れてくださいましたから。」  
(33：10)<sup>30</sup>

この時点で、伝承本文上は小休止の明白な証拠はありません<sup>31</sup>。それにもかかわらず、私はヤコブが〔まさにこの時点で〕この美辞麗句は適切ではあ

---

29 訳注：講演者の英訳による。協会共同訳では「ところで、私が先に出会ったあの家畜の一群は何なのか。」となっている。

30 訳注：講演者の英訳による。協会共同訳では「いいえ。もしご好意をいただけますならば、贈り物を受け取ってください。私は神の御顔を見るようにあなたの顔を見ておりますが、あなたは快く私を受け入れてくださいました。」となっている。

31 訳注：ヘブライ語本文では対話中に同じ話者の台詞でありながら、やや冗長にヴァッヨーメル「そしてそれから彼は言った」[וַיֹּאמֶר]、ヴァッヨーメル オード「そ

るが、エサウの求めている何かではないことに最終的に気づいた可能性は高いのではないかと疑っています。それ故、ヤコブはたった一言だけ変えることで続けます。彼は、何度も繰り返された「ミンハー」「贈り物」を、「ベラーハー」「祝福」[ברכה] という言葉に置き換えるのです。

どうか、あなたへと持って参りました『ビルハーティ』『私の祝福』[ברכתי] をお受け取りください。神が恵んでくださったので、私にはすでに何でもあります。」そしてヤコブはしきりに勧めた。するとエサウは受け取った。<sup>32</sup>（創世記33：11）<sup>33</sup>

ヤコブは彼が奪った物質的な祝福を返し、「祝福」という言葉を使うことによって彼がした悪事を認め、そしてエサウはそれを受け入れるということがようやく達成されました。兄弟は今や、彼らの間の亀裂を癒そうとするプロセスを始めることができます。私たちには、これがどの程度まで成功したか

---

してそれから彼はまた更に言った」[ויאמר עוד] などが挿入されることがある。それらは意義深い「間」の後で新しい一文が始まることを示す。例えば、出エジプト記 3 章 14-15 節では三回のヴァッヨーメル エローヒーム「神は言われた」、ヴァッヨーメル「彼（神）は言われた」、ヴァッヨーメル オード エローヒーム「神はさらにまた言われた」が神の台詞を三分割しており、モーセと神の対話か交渉の痕跡を暗示している。そうした本文上の証拠が創世記 33 章 10 節と 11 節の間には欠けているということ。しかし講演者は両節のヤコブの懇願の微妙な変化から、本文上の証拠は無くとも、彼の熟考と悟りに至る「間」がここに存在した可能性をみている。

32 このエサウへの術語〔ビルハーティー〕の重要性は、創世記における他の唯一の登場章句（27：36）によって補強されている。そこではエサウが、ヤコブは「ビルハーティー」[ברכתי] を奪っただけでなく、一言葉遊びを用いつつ「私の長子の権利」[ベホラーティー] [בכרתי] をも奪ってしまったと嘆くのである。（訳者からの示唆に感謝）

33 訳注：講演者の英訳による。協会共同訳では「どうか、持って参りました贈り物をお受け取りください。神が恵んでくださったので、私にはすでに何でもあります。」ヤコブがしきりに勧めたので、エサウは受け取った。」となっており、ミンハー（10 節）とベラーハー（11 節）を区別なく「贈り物」と訳出している（口語訳、新共同訳も同様）。なお新改訳では「贈り物」と「この祝いの品」と訳し分けられている。いずれにせよ、創世記 27 章 36 節と 33 章 11 節の間の同一語ビルハーティの反響は翻訳においては喪われている。

は知る由もありませんが、一世代前のイサクとイシュマエルと一緒に彼らの父アブラハムを葬ったのと同じ様に、エサウとヤコブも一緒に彼らの父イサクを葬ったようです（創世記35：29）。

## 結 論

この講演のタイトルによって提起された問いはまだ残っています。世代を超えて家長権を譲渡することについての聖書の慣習〔長子継承〕という〔法的・倫理的〕観点からすれば、ヤコブが〔自分のものではなく、取ってはならない〕間違った祝福を奪ったことは事実です。彼は、たとえ最後に象徴的に返したにせよ、エサウに予定されていた筈のものを取りました。その一方で、亡命の間に彼が経験したあの変容〔2頁第二段落で言及した人格的倫理的成長〕— 彼の名前がイスラエルに変わったことがその頂点ですが— の故に、彼は結局、少なくともそのレベルでは、〔物質的・情緒的・霊的に全人的成長をもたらす〕‘正しい’祝福を奪ったことが分かりました。しかし、人類のためにアブラハムとその子孫によって媒介された、神の計画についての聖書の〔暗黙の〕合意という観点からすれば、このことすべては、ほとんど何の影響も与えません<sup>34</sup>。ヤコブは、彼の最初の不正行為に関係なく、とにかくイサクから〔神によって運命づけられた者として本来自分が継ぐべき〕正しい祝福を受けました。イサクは、法的にエサウに必要であるものは何かについてだけでなく、どの祝福がヤコブに運命づけられているかについても非常に明確だったようです。

このように、ヘブライ語聖書には、しばしば人間の身勝手な独立心と衝突するように神の意図を並置するというパターンが確立されています。しかし、

---

34 訳注：ここで講演者が考えているのは、ヤコブがある時点でいかに間違っ振舞ったとしても、彼は神によって認識された潜在的特質をそれでも持っており、後には、神の目的が究極的に成就されることを可能にする良い人間になると、神の計画は確かに想定しているということである。

私たちの独立への願望は、私たちの創造そのものの一部として私たちに組み込まれています。なぜなら、私たちは神のかたちに造られているではありませんか？ ラビ的伝統はこの逆説を承認しており、それは私たち個々の人生において、また人類の集合的歴史の中で最後まで演じ切れなければなりません。それはラビ・アキバによって以下のように定式化されました。

彼〔ラビ・アキバ〕はかつて言った。「人間は愛されている。なぜなら、彼らは神のかたちに創造されているのだから。しかし、さらにより大いなる愛で以て、彼らに対して明らかにされたのは、彼らは、これほどまでに〔本当に〕神のかたちに、創造されているということだ。」

彼はこう結論しました。

ハツ・コール ツアーフーイ ヴェ・ホルシュート ネットウーナー

[הכל צפוי והרשות נתונה]

「すべてが予見されているが、選択の自由は保証されている。」

(ピルケ・アヴォート3:18-19)<sup>35</sup>

---

35 訳注：ラビ・アキバの引用はいずれも講演者の英文による。なお『ピルケ・アヴォート』にはナンバリングの異なる多くの版があり、この章節番号も講演者による。前後の文脈を含んだ邦訳については長窪専三訳『ユダヤ古典叢書ミシュナIV別巻 アヴォート』（教文館、2010）、84, 86頁〔3:14-15〕も参照せよ。